

○ 大和田城（大岩田城）跡（車窓から見学）

国道10号線と国道269号線が合流する都城市大岩田交差点の一角が大和田城という山城があった所である。往古より、都城盆地から大隅、薩摩へ通ずる要衝の地である。

南北朝の初頭、この山城をめぐる、日向守護職の畠山直頭（北朝方）と肝付兼重（南朝方）の争いが幾度かあったが、延元4年（1339）4月、肝付兼重に与する平山式部少輔の拠る大和田城は、畠山直頭勢の攻撃で落城した。（この後、研修する肝付兼重の拠った高城が落城したのが同年8月である）

ここの北側には都城という山城があり、大和田城と対峙していた。（故隈元信一先生）

○ 都城城跡

北郷氏（註1）の居城。永和元年（1375）北郷義久（誼久）によって築かれたという説がある。又、北郷氏初代資忠の室は、宮丸蔵人道時の娘で北郷義久を生んだ。道時に男子がなかったため、所領と居城を外孫の北郷義久に譲与したため義久は宮丸氏の居城に移り「都之城」と名づけたとする説もある。（都城市史より）

肥沃な庄内平野では、土地の領有争いが幾百年も続いたが、北郷氏の勢力が最も強大であった。豊臣秀吉が天下をとってから、秀吉の命により、伊集院忠棟（註2）が都城地方を領することとなり、北郷氏は、宮之城に移された。しかし、庄内の乱（註3）で伊集院忠棟一族が滅亡した為、北郷氏がこの地に復帰した。その後、都城島津家と名を改め、島津八家の一つ（4万五千石）として、明治維新まで存続した。

鹿屋城にいた伊集院忠棟は都城8万石の領主となった時、鹿屋から都城への道路（現在の国道269号線）の整備をしたという。その道路（街道）を庄内街道（しょねんけど）と鹿屋では呼ばれていたそうである。（故隈元信一先生）

（註1）北郷家

島津宗家4代当主・島津忠宗の子資忠が初代。資忠は北朝方として武功があり、薩摩迫一带（現：都城市山田町）を与えられ、その郷名をとり北郷を名乗った。2代目義久は薩摩迫から都之城に移る。その後、肥沃な庄内平野の領有を巡り周辺の北原氏、伊東氏、新納氏、肝付氏等との争いが続いた。戦国初期には庄内平野の極一部を領有するのみであったが、8代忠相（北郷家の中興の祖と言われる）、9代忠親、10代時久の時代には庄内地方のみならず曾於地方まで領地を広げ北郷氏の全盛期を築いた。

ところが英名を謳われていた10代時久が嫡男である相久に謀反の動きがあるという家臣の讒言を聞き入れ、金石城（現：都城市庄内町）で相久に自害を命じた。

相久が自害して1、2年後に当地方で凶事が続いた。また、夜中に白馬に乗った亡霊を見たなどという噂が広がり「相久の祟りに違いない」という領民の騒ぎを収めるため、時久は兼喜神社（金石大明神）を造り慰霊した。（相久の無実を知ったためとも）しかし、その祟りは300年以上経っても鎮らず、その類は北郷家にも及んだ。

北郷家11代を継ぐべき相久が自害させられたため、次男の忠虎が11代となるが朝鮮の役に出陣し病没する。12代は忠虎の嫡男忠能が継ぐが、忠能は上意討ちで家老等の家

臣約 50 人を殺すなど暗黒政治を行う。その忠能は精神に異常を来たし死亡。13 代は忠能の嫡男の翁久が継ぐが忠能が存命の間に早逝する。この後も 2、3 代に渡り、領主が早逝している。これらは、相久の祟りだと語り継がれている。(都城史談会平山氏の説明)

(註 2) 伊集院忠棟

天正 15 年 (1578) 九州の覇者島津氏が豊臣秀吉に降伏。家老の忠棟は剃髪し人質となり上洛、豊臣方と戦後処理に当たった。忠棟の優れた外交手腕が秀吉の知る所となり、高い評価を得た。天正 16 年 (1588) に肝属一郡を与えられ、8 年間鹿屋城を居城とする。その間、肝付氏の残党を屈服させると共に鹿屋城の整備に努めた。文禄 3 年 (1594) 薩摩領の太閤検地が済んだ翌年、都城 (8 万石) をあてがわれた忠棟は鹿屋から都城に移った。忠棟は検地後の知行配分の責任者に任ぜられていた為、島津宗家から嫉まれる存在となった。忠棟が都城の領主となったしわ寄せで都城を治めていた北郷氏は祁答院に移され 6 万 9 千石から 3 万 5 千石に減封された。これは北郷家にとっても島津宗家としても、甚だ面白くない事であった。(島津家では忠棟のことを国賊あるいは倭人呼ばわりした)

その様な中、京都の薩摩屋敷で島津忠恒 (家久) が忠棟を斬殺する事件が発生した。

この事件の動機や経緯について幾つかの資料 (文書) があり、それらを基に諸説が論じられているが、それら資料の全てが島津側 (勝者) の物であること。一方、敗者である忠棟の一族の殆どが殺され、文書や口伝が残されていないことを考慮すると、この事件の真相は未だ得られていないという見方も根強く残る。

(註 3) 庄内の乱 (1599~1600)

忠棟の嫡子忠真は父が斬殺されたことを伝えられと一族や家臣を集め合議した。その結果、島津宗家に反旗を翻すことになった。(忠真は義久のもとに伺い談判したが要領を得られなかった)

忠真は領内の 1 2 の外城に一族や家臣を配置し守りを固めた。対する島津忠恒は慶長 4 年 (1599) 6 月に鹿児島を出立し、同月 23 日、初戦で山田城を落とした。これと並行して串良地頭、島津圖書頭忠長を総大将とする軍が 6 月 22 日に恒吉城を攻め、25 日にこれを落した。しかし、その後は膠着状態が続いた。この頃、徳川家康が山口直友を庄内に派遣し忠真に降伏を進めたが、忠真がこれを拒否したため戦いは続いた。

翌年の 2 月 14 日、徳川家康は山口勘兵衛長友を派遣し忠真に再度降伏を進めると共に、義久と忠恒に忠真を許すよう勧めた。29 日、義久、忠恒が忠真を許す血判を押したので忠真も降伏した。

降伏後の忠真には頼娃 1 万石が与えられた。(後、帖佐 2 万石)

慶長 7 年 (1602)、忠恒は上洛に際し忠真に同行を命じた。途中、忠恒は日向野尻で狩りを催し部下に忠真を射殺させた。忠真は島津家臣の平田平馬と馬を交換していたため、誤って平馬も射殺された。対外的には両者とも誤射として片づけられ、誤射した押川某と淵脇某は切腹を命じられた。(しかし、その子等は破格の扱いを受け城下士となった) 尚、同日、忠真の母と弟 3 人も殺された。これらは、忠恒の計画的な暗殺であったと言われる。



都城市郡元の祝吉御所跡（島津初代・惟宗忠久の居館）にあった石塔をここ都城史料館に移設した。

中央の三体は肝付氏の宝塔

右端の二体は北郷氏の供養塔

左端の五輪塔は開山塔である。

↓ 拡大



石塔研究会の松田先生（香川県）は、この宝塔は肝付氏に似ているが北郷氏のものであると言われます。隣の北郷氏菩提寺の龍峯寺にもこの様な宝塔があります。しかし、私（隈元先生）はその説には疑問を持っています。肝付氏のものと同信しています。

宝塔（宝冠型）

相輪

輪の数で時代が分かる。

これは5本あるから応永末期である。

請花

兄弟数を表す。この場合、次男を表す。

首部（塔身の上）

宝塔には首がある。（五輪塔にはない）
首の高さで大まかな時代が分かる。

笠の縁が真直ぐ落ちる。肝付家の特徴である。

戒名が入っているので塔身は繰り抜かれ骨が入れられていたはずである。

（故隈元信一先生）

○ 兼重神社（都城市三股町）

兼重神社の目の前にある小高い丘が三股城跡である。この城と高城（月山日和城）は南北朝時代に肝付兼重が拠った城である。兼重は六代肝付兼藤の次男である。鎌倉時代の元寇の頃、兼重の兄、七代兼尚は弁済史職として地頭との領地の争いがあった。その訴訟のため鎌倉に行き行方不明になる。よって兼重は、肝付本家の肝付八郎兼重と、ここ三股城主の三股八郎兼重を名乗り、二つの職を兼務する形であった。南北朝時代、高城は畠山直顕により3度攻められている。

延元4年（1339）3度目の攻撃で高城が落ちる。この時、兼重は討死にする覚悟であったが、肥前の国から兼重の応援に来ていた江田家定という武士が兼重の陣羽織を剥ぎ取って、「三股八郎ここにあり」と兼重を装い、畠山軍に立ち向かい討死した。この時、実子（〇〇丸）も兼重の子の替え玉として、連れ立ち運命を共にしたという。

その江田家定の五輪塔を地元の人々は「腹切りどん」と崇めてきた。そして「兼重神社」と命名し一族や家臣の石塔と共に、ここに祀っている。

肝付家はこの武将の犠牲があったから戦国時代まで続き、肝付の名が歴史に残ったと云える。この宝塔の東面に梵字でキャ・カ・ラ・バ・アと刻まれている。四方仏なので納骨があるはず。形状から「しもぶくれ的五輪塔」とも言う。

奥には、高木氏（後にこの地を治めた一族）のものと思われる石塔もある。

（故隈元信一先生）



庄内の乱の折、伊集院勢が拠った12の外城には、「三股城」という名の城は見られなけれども、「梶山城」と記されている城があります。

おそらく、「梶山城」が兼重神社の目に見える「三股城」のことだと思われます。

（都城史談会の平山氏の説）

○南北朝時代（1333～1392）初期の南九州の形勢



北朝方：島津、禰占、北郷、菱刈、畠山、祁答院、高城、東郷、入来院、鶴田、蒲生等

南朝方：肝付、谷山、市来、知覧、鮫島、伊集院、矢上、指宿、北原、伊東、菊池、相良、檜井等